3.11　塩津遺跡　塩津町　位置不詳

契機　本遺跡出土の遺物については早く『但馬読本』に掲載されているが、その後昭和25年に藤原光輝氏が但馬地方を研究踏査のために豊岡高校を探訪し、注目して図を提示し資料紹介をおこなった。

塩津町出土が伝えられているのみで、確実な出土場所が確定されているわけではないが、ここでは一応そのように扱うことにする。本資料は、『古代学研究』第８号に詳しいので、内容をほぼそのまま引用しておく。なお、このように本遺物が豊岡高校に旧蔵されていたことは確実であるが、昭和30年代後半にはすでにその資料室には存在していなかったことも確かである。

立地　本遺物が発見されたという塩津町は、現在は廃川となっている円山川が九日市地区から塩津町にかけてまっすぐに流れてきた後、大きく蛇行して東方向に流れていく内側（東から南にかけて）のコーナー部分にあたっている。円山川が形成した自然堤防上の遺跡からの出土の可能性がある。

遺物　長さ 18 cm、最大幅 6 cm、厚さは最大で 2.5 cm を測る幅広のずんぐりした形態で、石材は粘板岩製と思われる。研磨がていねいな精良な遺物で、先端から三分の二あまりにかけての鎬が明瞭に観察され、基部には本来双孔が穿たれていた。

まとめ　遺物が単独出土と考えられることや、発見場所が特定できないことなどから今すこし資料的価値が高くない。全国的には、弥生時代中期の一般的な遺物であるが、当地方では類例のすくない遺物である。但馬内では、山東町仲田遺跡で出土例があるのみである。ものの交流といった面で、貴重な資料であろう。

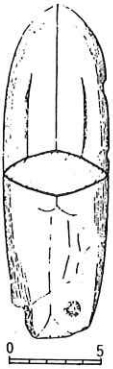


図69　塩津遺跡出土石剣実測図

3.12　神内岩遺跡　宮井字神内岩

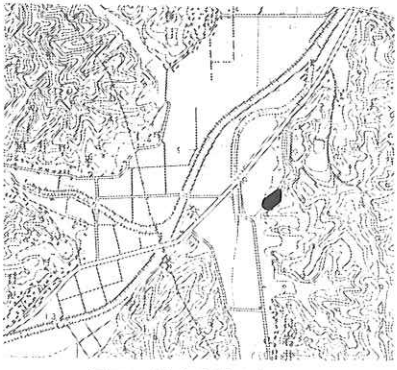


図70　神内岩遺跡位置図

契機　昭和62年７月、付近の八幡地区ほ場整備事業に伴って確認調査を実施したものである。

事前の分布調査の結果や地形観察によって、遺跡の本体は山裾斜面と考えられるが、確認調査を実施したのは工事で水路が設置される部分についてのみである。

立地　遺跡は、円山川支流の奈佐川右岸に位置している。奈佐川と支流の岩井川の合流地近くの南の山裾にあたり、標高は2.6ｍから３ｍを測る。

遺構　２ｍ四方のテストピットを計７個設定して土層の観察や遺構、遺物の有無を観察した。掘り下げの深さは平均して1.2ｍである。

土層状況は、上から順におおむね耕作土層・青灰色粘質土層・青味灰色

写30　神内岩遺跡の近景

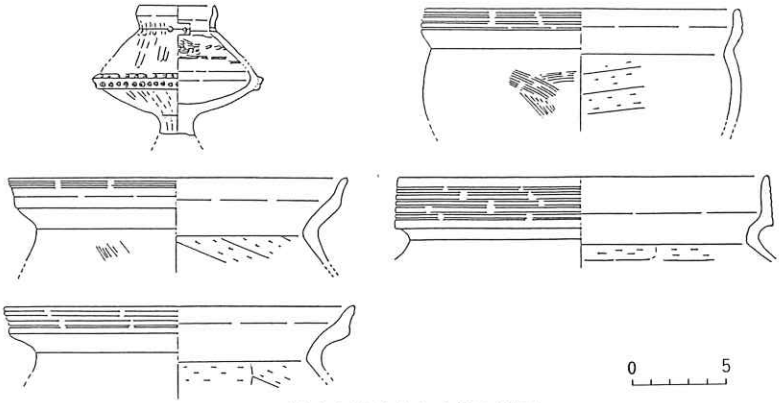


図71　神内岩遺跡出土土器実測図

粘質土層・暗赤紫味灰色粘質土層・黒味青灰色砂粘質土層・黒色粘質土層ないし黒色有機質土層となっている。

このうち、遺物を包含する層は水田表土下 50 cm から 90 cm の青味灰色粘質土層から黒味青灰色砂粘質土層にわたっており、出土量には多少の差が認められる。

遺構は、顕著な形では認められなかったものの、G4 で青灰色砂粘質土層を掘りこんだピット・杭・落ち込みが検出された。伴出した遺物からみて弥生後期のものであろう。遺構はこのテストピットのみであったが、G5 では最下層に自然木などが大量に堆積しており、旧地形が谷状になっていたことが考えられる。

遺物　遺物は、弥生後期から古墳時代前期にかけてのものが大半で、これに次いで若干の須恵器や陶磁器が出土している。古いものでは弥生中期の土器が混じる。

まとめ　本遺跡は、山裾斜面に形成された生活の跡で、遺物出土の範囲は東西 120 m 程度である。遺物が示す時期は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのものが多く、後に述べる岩井地区の本井墳墓群を残した人々の生活の場があったのであろうか。

地形から判断すれば、住居址などが存在するのは調査地のやや上方で、現状の畑地部分と推定され、調査出土遺物は当然ここからの流入とみられる。

3.13　上鉢山東山墳墓群　上鉢山字東山ほか

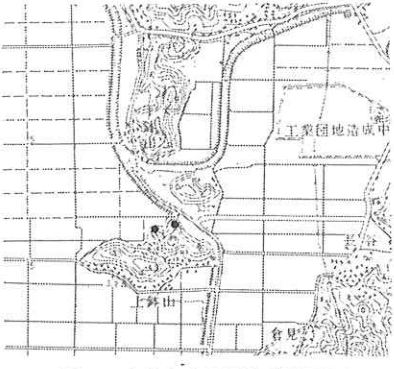


図72　上鉢山東山墳墓群位置図

契機　豊岡土地改良事務所が進めている広域営農団地農道の新設に伴って、昭和62・63年に発掘調査を実施したものである。調査着手前には、市域に多い古墳のうちの1基と考えていたが、発掘調査が進み、大量の土器の出土によって弥生時代後期ころの貴重な墳墓群であることが判明した。土器のほかに、わずかな鉄製品・銅鏃・玉類が出土し、特に土器の整理が進めば良好な編年資料となろう。

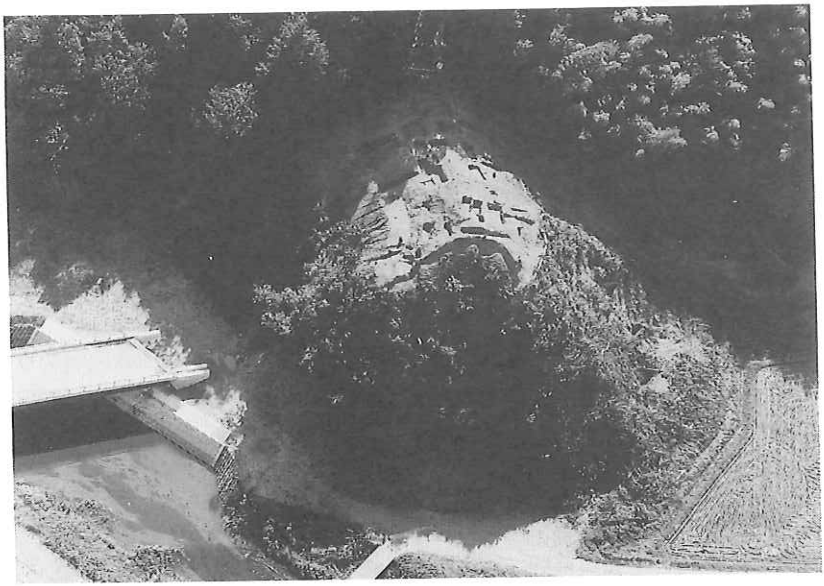
立地　東山墳墓群は、行政的には豊岡市上鉢山字東山に属し、地元の氏神である八幡神社がある高さ45mあまりの低い丘陵状の山頂から延びていく2本の小枝脈上に位置している。

今回の農道整備工事（新設）事業が計画されたころ、事前には知られていなかったが、地形測量のための樹木の伐開後に念のため分布調査を実施したところ、東尾根に2、3基程度の古墳らしい地形変化が認められ、また西尾根にも2基程度の地形変化が認められた。

西尾根は標高で22mから25mの所にあり、調査前には尾根先端部近くの平坦な地形の場所で、墳丘としての高まりはほとんど認められなかった。

また東尾根では、西の群に比較すると尾根幅も広く傾斜も平坦で墓遺構が立地する適地であるといってよい。西尾根同様、標高28m程度の比較的低い丘陵尾根に立地しており、当初は2、3基からなる古墳群と考えていた。

遺構　西尾根では、調査の結果およそ東西14.5m・南北10mの範囲のなかに12基の埋葬施設が存在することが明らかになった。そのうちの第4－2主体では、墓壙を検出した高さで土器が出土しており、いわゆる墓上祭祀・土器供献の儀礼がおこなわれたものと思われる。土器の種類は、高坏・台



写31　上鉢山東山墳墓群東尾根上空写真

付鉢・甕であり、木棺の痕跡を探っていくと棺の側および棺底で甕の破片が出土した。

一方、東尾根からは総数29基以上を数える墓群が検出された。すくなくとも１本以上の溝、あるいは埋葬施設を造らない空間などを設けることによって、いくつかの群に分割されるものと理解される。

遺物　出土状況のうち代表的な例として、先の西尾根第４－２主体では、棺側に置かれていたこれらの破片が、墓壙上面で見つかっている甕の破片と接合可能であった。また、同遺構の棺底では、ガラス小玉85個が連結された状態で出土している。そうした葬送の祭が想定できる。

東尾根では、西尾根では一部でしかみられなかった棺周辺に土器を割って置くという儀礼が、総数29基中の27基で認められた。また、銅鏃の副葬も興味深いもので、３基の埋葬施設から計４本が見つかっており、但馬地方ではきわめて珍しい遺物である。

さらに、ガラス製小玉や碧玉製管玉の副葬、さらには鉄製品の副葬も比較的多くの埋葬施設で認められた。

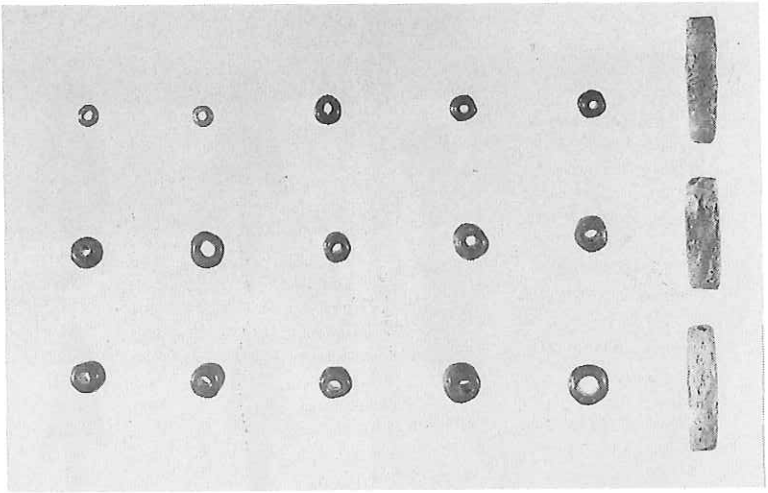
東山墳墓群では、調査した41基の埋葬施設から計78個体の弥生時代後期ころの土器が出土した。土器の種類は甕形土器が最も多く41点で、次いで水差形土器７点、長頸（首部分が長い）の壺形土器２点、短頸のそれが4点、高坏形土器９点、台付の鉢形土器４点などとなっている。

このなかには、京都府竹野郡丹後町の大山墳墓群・綾部市の久田山南遺跡から出土したものと同形態の高坏形土器が含まれており、他の土器の形なども比較してみると、丹後地方と当地域の交流が盛んにおこなわれていたことがうかがえる。

土器以外の遺物は、玉類と鉄製品・銅製品がごくわずかな埋葬施設から検出されている。４基から各種のガラス製の玉類が出土し、それらは管玉18個・丸玉96個・小玉284個の計398個で、管玉は青緑色、丸玉は空色と紺色、小玉は緑青色を呈している。

ガラス管玉の出土は珍しく、比較的近い時期のものとしては、近くでは豊岡市大篠岡の半坂墳墓群、浜坂町井ノ谷３号墳での類例が知られている。

写32　上鉢山東山墳墓群土器供献の例



写33　上鉢山東山墳墓群のガラス玉

鉄製品は、鉄鏃・ヤリガンナが出土している。このうち鉄鏃は２基の埋葬施設から２本ずつ出土した。２本は茎部をもたず、木ではさみ込んで使用する無茎の長三角形腹抉式と呼ぶ形式のもの、残る２本は有茎の柳葉形式とされる鉄鏃である。いずれも、通常この時期に認められる形式のものである。

次に銅鏃について紹介する。銅鏃は、全国的には数多く出土しているが、明確に墳墓に伴う形で出ているものはさほど多くない。

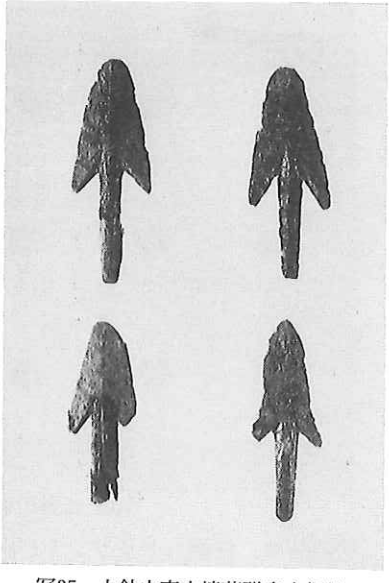
銅鏃の但馬地方での出土は、古墳時代の森尾古墳、弥生時代と思われる出石町小野に所在した墳墓での例がある程度である。

まとめ　今回調査された東山墳墓群は、両尾根の墳墓群とも弥生時代後期でも比較的古い時期の集団墓で、具体的には畿内第Ｖ様式期でもⅣ期に近い時期のものと推定されている。

狭い範囲のなかに、しかもなかには急斜面という立地条件の不良な前者に12基、後者の比較的立地条件が良好なやや広い部分に29基もの多数にのぼる埋葬施設が存在していた。

後者では銅鏃をはじめとして、やや遺物が多い点が指摘されそうであり、特に、棺側に破砕した土器を埋納する儀礼は、他地域にすくなくとも一般

写34　上鉢山東山墳墓群出土土器



写35　上鉢山東山墳墓群出土銅鏃

的にみられるという状況にないため、この時期の豊岡盆地の葬送儀礼の実態や、ひいてはその系譜、人々の動きなどを解明していく上で貴重な例を提供することになったと考える。

図73　上鉢山東山墳墓出土破砕土器供献復元図

3.14　大篠岡半坂墳墓群　大篠岡字半坂

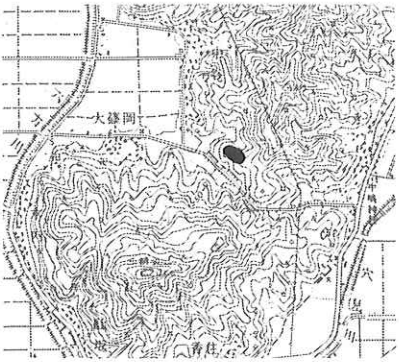


図74　大篠岡半坂墳墓群位置図

契機　森尾・立石両地区を中心に建設中の豊岡中核工業団地にむけた上水道給水計画にもとづき、市は当該地に配水池の築造を計画した。

市教育委員会で現地周辺の分布調査をおこなったところ、明確な古墳や城跡などの地形は現状では観察できないが、立地や周辺遺跡との関連からみて確認調査を実施する必要があると判断した。

現地は、近年になって野外活動施設として使用されていたために旧地形の不明な部分もあり、低墳丘の古墳などが存在する可能性も十分考えられたことによる。調査は昭和61年７月から９月にかけて実施した。

立地　調査地は豊岡盆地の東側丘陵部に位置している。「但馬富士」の名で親しまれている中世山城のある三開山の北側にあたり、大篠岡地区から三宅地区へ越す半坂峠に沿ってのびる尾根である。周辺の地形からみるとやや奥まった立地であり、西向きに下降する比較的ゆるやかな尾根の稜線上である。

遺構　調査は、尾根上に適宜トレンチを設定して実施した。この結果、調査区域の北西端部において弥生時代の墳墓群の存在が確認された。しかし群の広がりは、尾根の西続きが土取りによって失われていることもあって、比較的小範囲であった。墳墓群については、調査範囲を拡張して全掘することにした。

調査の結果、弥生時代後期の方形周溝墓２基を含む木棺墓群を検出した。地形からみて、木棺墓群はさらに西下方に続いていた可能性が強いが、さきに述べた土取りのために失われていることから、本来の範囲や構成の在り方は知ることはできなかった。

検出したのは、１号墓・２号墓と命名した方形周溝墓２基とこれらの埋

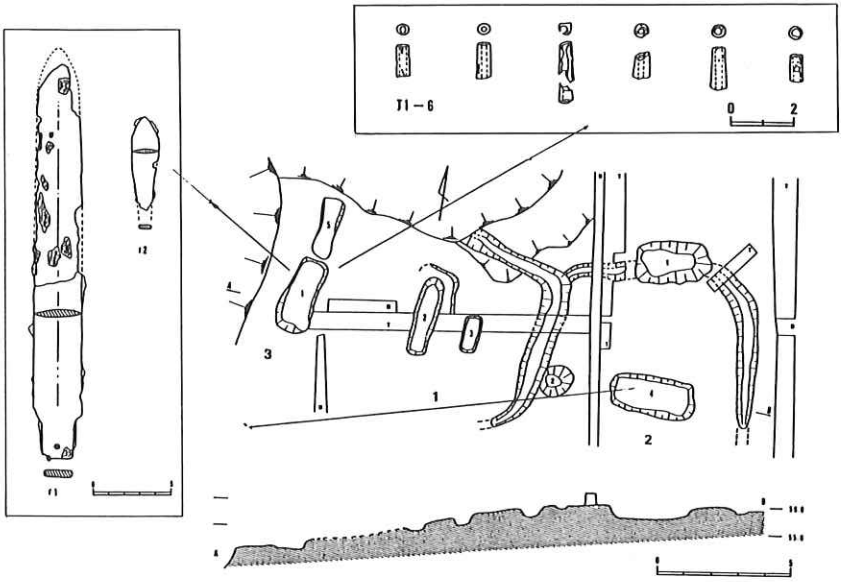


図75　大篠岡半坂墳墓群検出遺構

葬施設が計3基、さらにこれ以外に2基の木棺墓と2基の土壙がある。

1号墓は、周溝の北東コーナー付近が良好に検出できたが、西および南辺は流出している。推定では一辺8～10 m の規模となろう。溝の幅は50～90 cm で、比較的明確な堀り込みをおこなっている。埋葬施設は2基で、主軸を南北にそろえている（埋葬施設2・埋葬施設3）。

2号墓は1号墓の東に接しており、周溝は東辺と北辺の一部を除いて不明確である。推定で一辺9～10 m の規模となり、西辺は1号墓の東辺と重複していると考えられた。しかし調査では両者の前後関係は確認できなかった。埋葬施設は1基で、やや南にかたよった位置から検出された。主軸を東西に置いている(埋葬施設4)。この北側は精査したが埋葬施設の形跡は認められなかった。

1号墓の西下方では、埋葬施設1および5が東西に直列に検出された。この2基はその位置からして、1号墓の西辺より外に配されているものであろう。周囲の状況から、本来、溝などの区画はもたなかったとみられる。

以上、計5基の埋葬施設の詳細は次のとおりである。

表2　半坂墳墓群埋葬施設一覧

番　　号	墓　　壙	棺・主軸・頭位	出土遺物など
埋葬施設1	2.75m×1.2m 隅丸長方形	2.1m×0.55m　北 南北	ガラス管玉5、鉄鏃 棺側、棺内より甕片
埋葬施設2	2.95×0.8 〃　二段　？	2.05×0.4　北 〃	棺側より甕片
埋葬施設3	1.3×0.7 〃	0.9×0.35　北 〃	とくになし (子供用か)
埋葬施設4	3.05×1.5 〃	2.3×0.75　西 東西	鉄剣 棺内より甕片
埋葬施設5	2.4×0.85 〃	2.1×0.4　南 南北	棺側より甕片

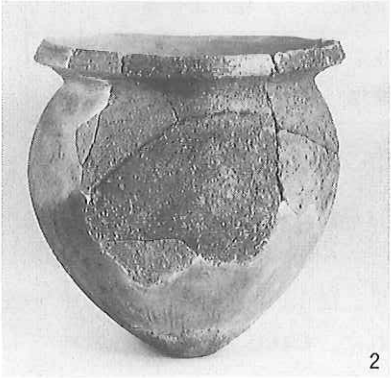
土壙1は、2号墓の北辺の溝と重複しており、2m×0.8m・深さ0.3mの不整形な長円形を呈している。内部は黒色軟質土で、高坏を主とした土器片が多く含まれていた。

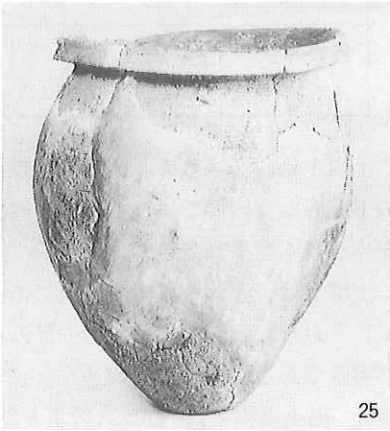
土壙2は、埋葬施設4の西側にあって、径1.1m・深さ0.25mの円形を呈しており、上面に土器片が少量みられた。これら土壙の性格については不明確である。

遺物　出土遺物では、ガラス管玉と鉄剣が注目できる。また、棺側あるいは棺内から破片で出土する甕は、棺内に遺体を納めてから埋土をおこなうまでに、意図的に割った固体の一部をバラまいたものとみられる。葬送過程での儀礼らしく、市内でも類例が増加しつつある。

ガラス管玉は希少な例で、時期をとわずに示すと浜坂町の井ノ谷古墳群、駄坂舟隠古墳群、先にふれた上鉢山東山墳墓群などで出土しているものの、ガラス小玉の例に比較すると圧倒的にすくない。

まとめ　1・2号墓は、それぞれ南辺と西辺の状況がよくわからないものの、方形周溝墓と考えられる。但馬地方では初の確認例であったが、その後八鹿町八木地区の西宮遺跡・豊岡市駄坂の舟隠墳墓群などで知られてき





写36　大篠岡半坂墳墓群出土土器の一部

ている。

埋葬施設はいずれも木棺直葬墓で、尾根の走行方向に直交ないし平行に造られている。それらは、配置から１号墓・２号墓・３号墓の３グループに分けられよう。墳墓群の時期は、弥生時代後期中頃から後葉と考えられ、市内で確認されている東山墳墓群より新しく、妙楽寺墳墓群・立石墳墓群・立石山崎墳墓群などよりやや古く位置づけられる。

写37　大篠岡半坂墳墓群１号墓

3.15　香住ヱノ田墳墓群　香住字ヱノ田

図76　香住ヱノ田墳墓群位置図

契機　豊岡市および県住宅供給公社が主体となった香住住宅団地の建設に伴って調査したものである。弥生時代後期の墳墓群と古墳群、奈良から平安時代頃の建物群など各時期の遺構があるが、ここでは、弥生時代とみられる墳墓について説明しよう。

立地　標高 42 m のなだらかな頂きをなす独立性丘陵から、やや急な傾斜で下降する南側尾根上に 6 世紀頃の古墳が 5 基築造されている。墳墓は、このうち高位置に占地する 5 号墳の裾部にあたる位置でみつかった。標高にして 35 m 前後の尾根稜線部である。

遺構　5 号墳の墳丘南側裾部から、地山を掘り込んだ木棺葬の土壙墓が 2 基検出されている。古墳群の築造の際に、ほかにもあった墳墓が破壊されているらしく、下方に位置する 3 号墳下から弥生後期ころの土器を伴った幅 1.2〜1.6 m、深さ 0.3〜0.4 m の溝が検出された。墳墓群内の区画の溝かと考えられる。

2 基の木棺墓の場所は、4 号墳の溝と 5 号墳の間にあるテラス状部分で、尾根に直交するように東西向きに直列して検出された。

東側の第 1 主体部の墓壙は 2.02 m×0.78 m の隅丸長方形を呈し、東小口側をやや広く掘り込んでいる。棺は 1.19 m×0.41 m で東が幅広に検出できた。

西に並ぶ第 2 主体部の墓壙は、2.93 m×1.53 m の隅丸長方形を呈し、棺の規模は 2.16 m×0.52〜0.62 m で、東が幅広の箱形に検出できた。

遺物　遺物は、第 1 主体からは、棺内から鉄鏃・ヤリガンナを各 1 点検出した。また棺外からは弥生土器もしくは古式の土師器の壺が 1 個体分出土し、棺の東側の周辺に意識的に破片をバラまいた状態であった。

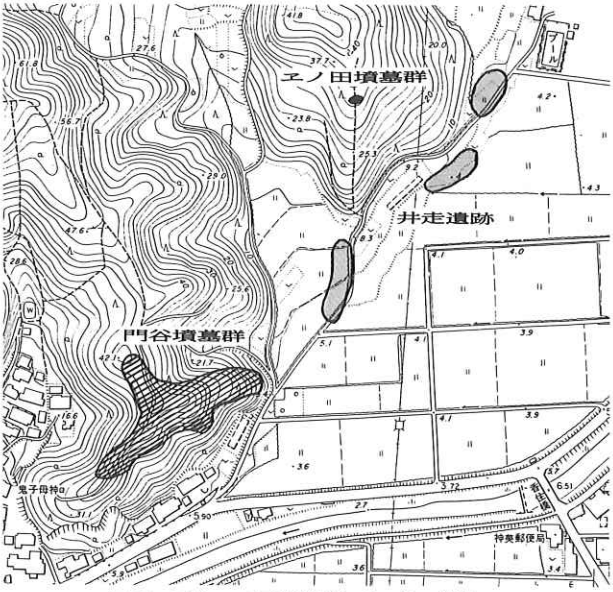


図77　香住エノ田墳墓群とその他の遺跡

第２主体の遺物は、棺内からごく小片であるが土器片を検出している。おそらく甕の破片であろう。

まとめ　本墳墓遺構は、時期的にはやや不詳な点も残るものの、須恵器を伴う一連の古墳群に先行して営まれた墓であることは相違ない。谷を隔てた南に展開する丘陵尾根には、まさに累々と弥生時代後期から末期の墳墓群である門谷墳墓群が築かれており、これとの関連も課題となろう。すぐ下方の山裾部分には弥生後期から古墳時代前期頃の集落址が存在しており、集落と墳墓とがセットで調査された例として興味深い。

写38　香住エノ田墳墓群埋葬施設

3.16　立石墳墓群　立石字ヒヂグチ

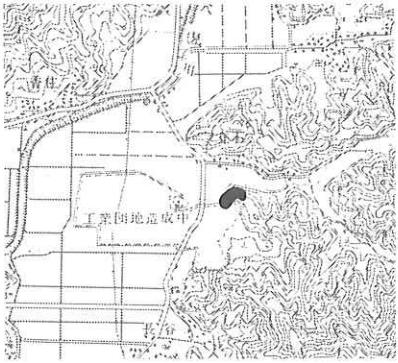


図78　立石墳墓群位置図

契機　豊岡中核工業団地の造成工事に伴って発掘調査を実施したものである。調査は豊岡市教育委員会が主体となっておこない、97・98・99・100・101・102・103号地点が弥生時代から古墳時代にかけての墳墓群である。

ここでは、遺物や遺構のうえで注目される103号地点の状況について説明し、必要に応じて他地点におよんでみよう。

立地　墳墓群の立地について、簡単にふれよう。104号墳から北西に向いて下降を始めた尾根斜面がおよそ150 mの地点でやや広がりをもつ。

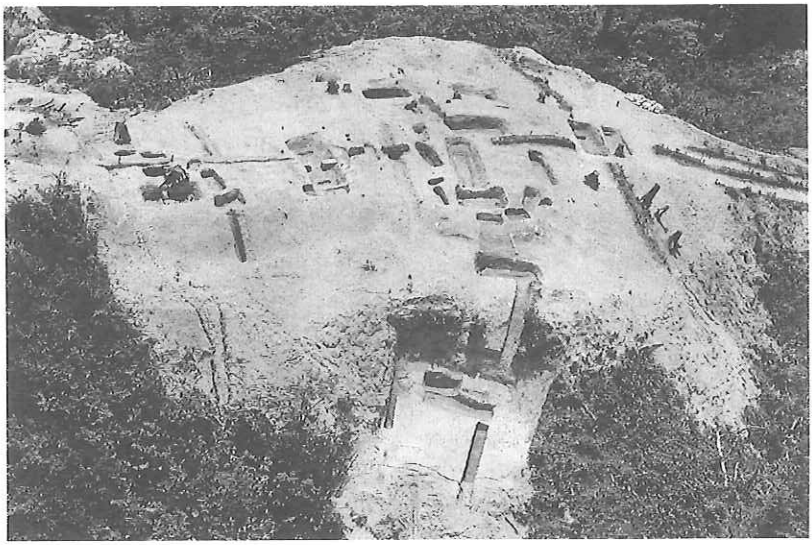
ここから尾根地形が北西に向いて下降しており、顕著な地形変化は認められない。しかし、102号地点に至って、強いて表現するなら一辺7 m程度の方形の地形がうかがえる。

北西を向いて下降してきた尾根が、101号地点においてその方向を変え、それ以降は西からやや南にかけて降下していく。その距離は実測部分で約30 mを測り、その間に3か所程度のわずかな平坦地を確認することができた。それぞれ、地点名を与えている。

遺構　遺構は、第75図の通りであった。主体部名は、確認された順に付していったもので、特に意味があるものではない。

さて、103号地点と総称してはいるものの、より厳密には数群に分けられる可能性がある。

本地点では、平坦面の規模が9.5 m×10.5 mを測り、そこに14基の埋葬主体を有し、それぞれの想定基底ラインの外側にも2、3基の埋葬主体が認められる。さらに、上述してきた墳墓群の東側斜面を加工して、やや下方に2基からなる一定の墓域を有する一群がある。このG群を除くと、検出



写39　立石墳墓群上空写真

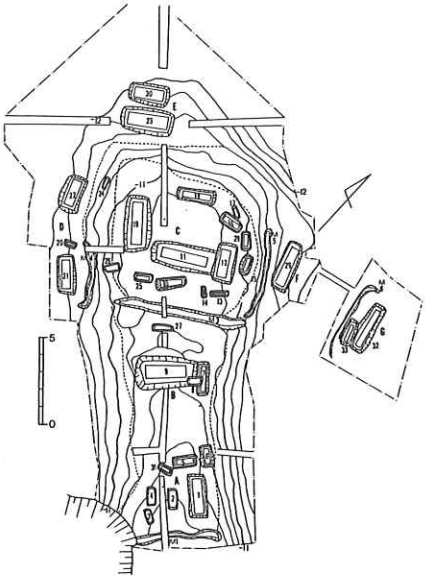


図79　立石103号地点遺構配置図

された遺構は、おおむね高低差 1.8 m あまりのうちに納まっている。以下、重要な遺構についてのみふれることにしたい。

第11主体は、溝 3 などと平行に設置された大型の主体部である。数値は復元値であるが、長さ 3.65 m ・幅 1.56 m の上面規模で、形態は断面 2 段の隅丸の長方形である。

本主体の木棺は、規模は長くて 2.3 m、幅は 0.5 m を越えるものではあるまい。小口側の幅の大きさなどから、南西側頭位とみてよかろう。103号地点では唯一の二段墓壙であり、立石墳墓群では102-3、101-4とともに数少ない例となっている。その占地から考えてC群方形台状墓の中心的な位置を占めるものと考えてよかろうし、当然早い時期に造られたものとみて大過あるまい。

第18主体も、群内の主体的な墓壙で、第11主体とともに盟主的存在であったとみてよかろう。規模は、2.30 m×0.85 m の不整形ではあるものの、一応隅丸長方形を呈した素掘り墓壙で、地山検出面からの深さで 0.55 m あまりを測る。

本主体部は小口穴を設けず、木棺を埋置しており、その大きさは長さ 1.9 m・幅 0.45 m を想定できよう。

第19主体は、第11主体よりやや小ぶりではあるが、群中では大きな部類の墓壙で、3.25 m×1.65 m を測る。小口穴は設けず、墓壙の中央に長さ 1.7 m・幅 0.6 m 程度の木棺を埋置したものと思われる。玉類の出土状況から、頭位は北西側と思われる。

これらの埋葬施設からは、若干の遺物の出土があった。墓壙上面あるいは埋土中に、また棺内に遺物を確実に伴う主体部は第18・19主体のみで、その他はやや不確実である。墓壙上面に土器を置いた（破砕して）例としてもこの 2 基がある。第18主体は高坏・壺・甕が、また第19主体には器台・鉢・壺がそれぞれ供献されていた。

また、棺内から遺物の出土があったものとして、第11・18・19主体がある。18では、棺内南東小口付近より鋤が出土している。鋤は 7 個体で、ほぼ棺底に接して出土しており、木棺の部材、具体的には底板や蓋板もしくは側板の補強に用いられた可能性が高いものの、明確にすることはできな

かった。

第19主体からは本墳墓群中で唯一の玉類が出土している。玉類は、北西側小口部の東寄り部分を中心に散らばっている。種類は硬玉製勾玉１・碧玉製管玉36を数える。ほぼ棺底より検出されたことと、その散らばっている状態から考えて着装状態で副葬したものではなく、“玉の緒を切る”状態で副葬したものだろう。

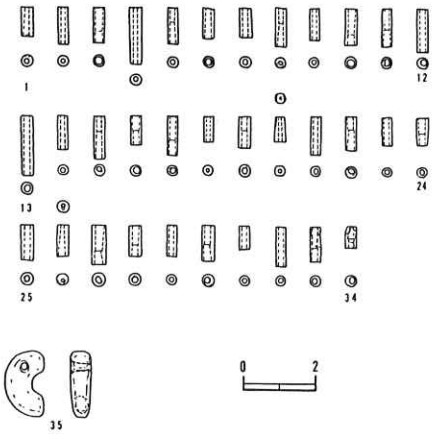


図80　立石103号地点第19主体玉実測図

遺物　遺物は、上にみたように若干の棺内から鉄製品、玉が出土し、墓壙上面に土器を供献した例が指摘できる。先に説明した上鉢山東山墳墓群のように破砕土器を棺のまわりに供献する例はここでは皆無であった。地域が同一なだけに、一方では破砕土器を木棺の周囲に埋納する上鉢山東山例や香住門谷例があるのに対して、こうした立石墳墓群の例があるのは、いったい何に起因するのか興味深いところである。

第19主体の玉類は、まさに古墳前代の様相を示している。硬玉製勾玉、やや軟質とはいえ碧玉製管玉一連は優秀な遺物である。鉄製品の希少さも注目しておきたい。

まとめ　出土土器によって当該墳墓群の時期は、弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけてであることが判明した。まさに本格的な古墳が成立する前夜の状況を示した墳墓群であるといえよう。

集団墓を構成する個々の集団には、玉や鉄器を保有し副葬できる層と、そうでない層に分化していく直前の姿がうかがえる。しかし、いまだ本格的な首長の墓すなわち古墳の出現には至っていないと評価するのが至当だろう。

豊岡市域にあっては、このあとおよそ100年を経過して４世紀代後半のあ

る時期に至って後述する森尾古墳が出現する。同古墳は、さほど大きな墳丘を有するのでもなく、埴輪や葺石さらには周濠といった外表を飾る要素がことごとく欠落しているため、けっして畿内的な色彩の古墳とは評価できないものの、北但馬地方では最古の部類に入れられる古墳のひとつである。

したがって立石墳墓群以降、どうした経過を経て森尾古墳のように成長していくのかを見極めていくことが今後の課題であろう。

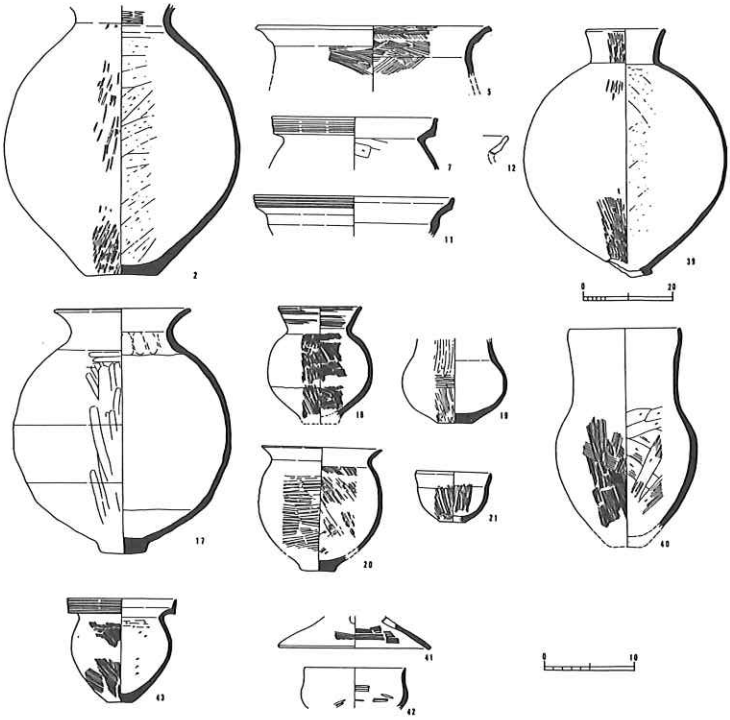


図81　立石墳墓群出土土器実測図

3.17　岩井本井墳墓群　岩井字本井

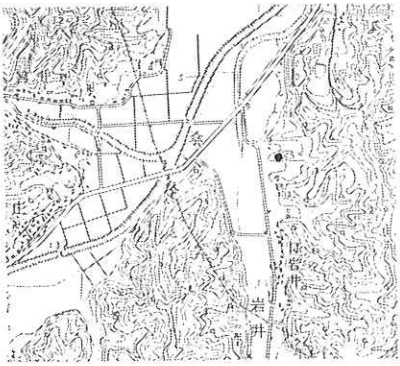


図82　岩井本井墳墓群位置図

契機　豊岡市を含む１市５町による清掃センターの設置計画が、昭和61年度当初に急きょ浮上し、埋蔵文化財の有無に関心をはらっていた担当課からの依頼でまず確認調査を実施した。

また全面調査についても、現状保存の可能性がないために全面調査に切り替えて進めていった。調査は、昭和62年９月から開始した。ここで紹介するのは、そのうちの１号墓と４号墓についてである。

立地　１号墓は尾根先端に位置し、山裾から急勾配でレベルを上げてきたあと稜線で初めて比較的緩傾斜の地形に変化する位置にあたる。

西から東に少しずつレベルを上げていくが、全体としては地形変化は認められない。墳丘を意識させる高まりは認められず、溝などによる区画のための施設はなかった。

一方、４号墓は調査の結果、西側も尾根に直交する溝で区画され、東側は尼城址の堀切によって墳丘の一部をカットされた墳墓であることが判明

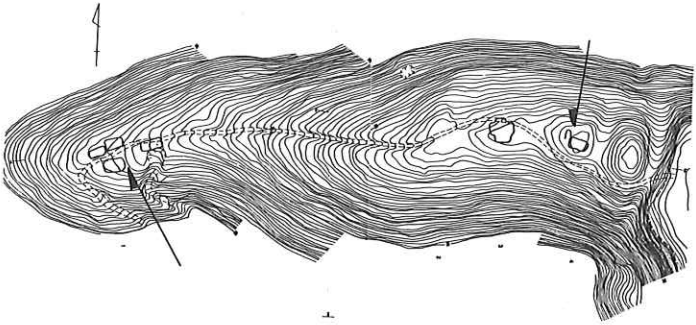


図83　岩井本井墳墓群の立地

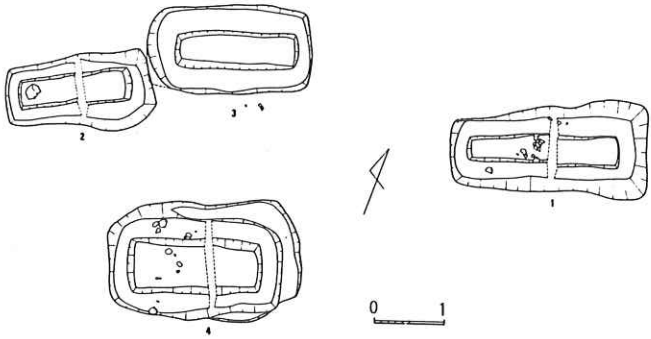


図84　本井１号墓墓壙配置図

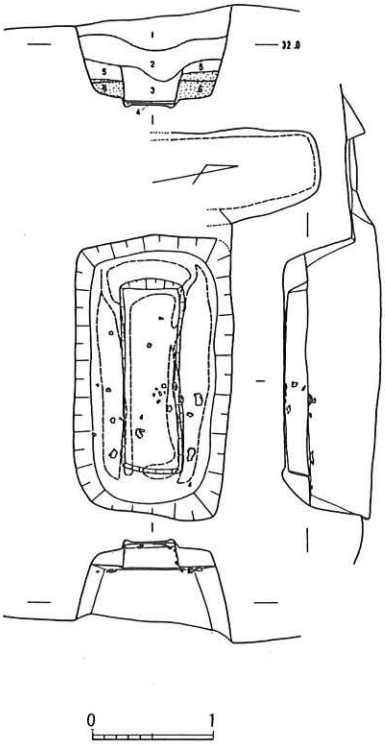


図85　本井４号墓第１主体実測図

した。

遺構　いずれも、全面的に表土剝ぎから開始し、ていねいに遺構の検出を試みた。１号墓は、稜線のほぼ中心線上に尾根方向に造られている。東西方向 9.5 m の間に、4 基の埋葬施設が地山に直接掘り込まれている。

それぞれの規模は、大きいもので長径 2.8 m 程度、小さいもので 2.09 m あまりである。こうした墓壙内には、いずれも土質や色の差で木棺が組み合わされたものと推定された。

4 号墓は、尾根に直交する細く深い直線的な溝で区画し、墳丘中央と思われる位置に、尾根方向の埋葬施設１基（第１主体）とそれに直交する形で、第２主体が一部切り合う状態で位置している。

溝状遺構が、３号墳東側溝の東１ｍに位置している。２本の溝はそれぞれ尾根に直交しているものの、平行ではなく少しずれている。溝は地山を掘り込んでおり、断面はＵ字形を呈し、両壁とも鋭角にしっかりと立ち上がっている。

１号墓の第１主体からは、棺側と棺内で甕１個体が割られた状態で出土した。棺内出土の破片は、棺側の破片との関係などを考えると、棺上面に

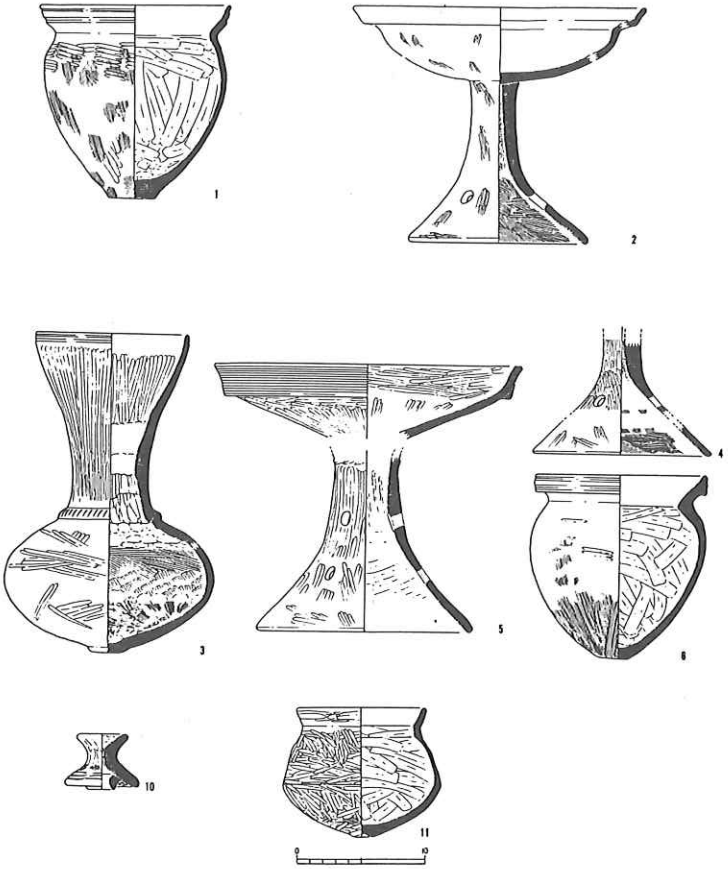


図86　岩井本井墳墓群の土器実測図

割って置かれた土器が棺の腐朽につれて棺内に流入したものと思われる。

第４主体では、墓上祭祀に伴う土器群と思われる高坏・長頸壺・器台が認められた。墓壙内では棺側、棺内で甕１個体が割って置かれていた。棺内の土器片は、棺底から若干浮いた状態であった。棺内の他の遺物では、ヤリガンナ１本が出土している。

４号墓の場合には、墳丘上のものと第１主体墓壙内のものがある。第１主体では、鉢１個体が割られてバラバラに置かれた状態で出土した。もとは棺上面に置かれていたものが棺の腐朽に伴い、棺内に流入したものと思われる。

遺物　出土した遺物のうち、甕１は但馬・丹後・丹波北部地方の口縁形態に畿内中心部に特徴的なタタキ技法をとりいれる折衷形態として考えられている器形である。注意しておきたい。

まとめ　１号墓は、弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての集団墓である。埋葬施設の間には、特記すべき大きな格差はないが、規模の大きいふたつの埋葬施設には、棺上・棺側に甕１個体を割って置くという共通の葬送儀礼行為を認めることができる。第４主体では墓上祭祀がおこなわれ、棺内にはヤリガンナの副葬が確認された。

また、４号墓は、弥生時代後期後半から古墳時代初頭のころの墳墓である。１号墓とほぼ同時期の墳墓であろう。墳丘は、東西方向の約７ｍの規模の長方形プランを示している。細く深い直線的な溝によって区画された比較的しっかりした墳丘を有している。１号墓同様、墓壙の上面に土器を割って置くという共通した儀礼行為が認められる。

すでにしばしば述べたように、棺上もしくは棺側に土器を破砕して埋納するという儀礼は、現状では北但馬の一部でのみ確認される特殊なもので、円山川左岸地域では次に述べる妙楽寺墳墓群と本例が知られるのみである。

別のところでもふれているが、弥生墳墓からの遺物も、あるいは古墳からの遺物にしても、特に玉関係遺物が円山川右岸域と左岸域できわだった差異をみせている。左岸域に属する本遺跡の場合にも、ガラス小玉や碧玉製管玉が存在していなかった。両地域における生産性の差や葬送習俗の相違をみてとることができる。

3.18　妙楽寺墳墓群　妙楽寺字大谷ほか

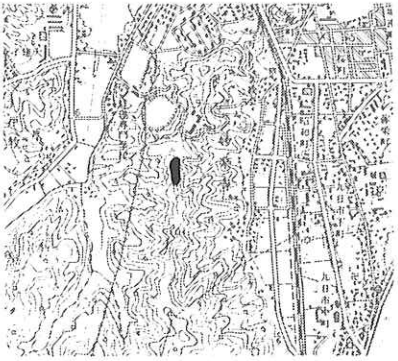


図87　妙楽寺墳墓群位置図

契機　昭和48年と49年に、当該地一帯にわたる住宅団地の造成が民間資本によって計画されたため、事前の調査が実施された。後に述べる見手山前方後円墳の保存問題等とも関連して、市内遺跡では初めて、本格的にその扱いをめぐって紛糾した重要な遺跡であった。

ここで説明する遺跡は弥生時代後期から古墳時代初頭ころにかけての墳墓群であるが、発掘調査の契機となったのは小さな土器片が１点採集されたことによる。

発見当時には、但馬はもちろん全国的にはさほど類例が蓄積されていなかった当該時期の墳墓が、２次にわたる調査で計36基が検出された。

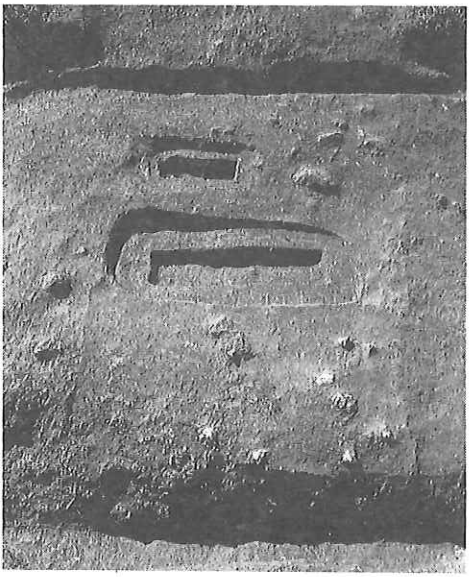
立地　調査の結果、墳墓群は南北 170 m 以上の尾根稜線上にわたっており、すくなくとも西側の尾根筋には伸びていっていないようである。

遺構　最南部分にあたる第６・７地点では、狭い範囲の確認調査がなされたのみで12基の埋葬施設が検出されている。埋葬主体のほかにも溝状遺構が確認されていることから、溝で区画されたいくつかの単位墳墓群の存在が想定されよう。すぐ北の第８地点では、３基の埋葬施設がいずれも尾根主軸に直交する方向に並列して検出されている。

さらに尾根続きの第5地点は、調査の契機となった土器採集地点である。計３基の台状墓が検出され、墓間には２本の溝を有している。５Ａに３基、５Ｂは単独１基、５Ｃは不規則に、しかしほとんど切りあうことなく５基の埋葬施設が検出されている。

第４地点は、第５地点から北に傾斜する斜面とその終点までの約 30 m あまりの範囲である。４本程度の溝で区画された３ないし４基の方形台状墓の存在が明らかとなり、そこから計12基もの埋葬施設が検出された。

写40　妙楽寺墳墓群第４地点の遺構全景



写41　妙楽寺墳墓群第４地点Ｄ区方形台状墓

以上みてきたように、本墳墓群は基本的には数基の方形台状墓が尾根にほぼ一列に配置された形となっているが、調査範囲の狭い第６地点付近にはこうしたものとは別の群在する墓群がある可能性が強い。

遺物　遺物は、その多くが土器である。明らかに棺内遺物と想定できるものは鉄製品のみで、玉類は棺内外とも皆無であった。個々についてみていくと、土器類は高坏・坏・器台・壺・甕・鉢など多様である。出土の状態は良好でないが、ほとんどが墳墓上ないし墓壙上からの出土もしくはその流失であり、別に述べた東山墳墓群のような墓壙内の棺側に割って置くような例はなかった。土器の量は第４地点が圧倒的であった。棺上に置いた例は、少ないながらも存在する。

次に鉄製品では、ヤリガンナと剣が出土したのみである。いずれも第４地点からの出土で、棺内に副葬品として埋納された例である。それに対し

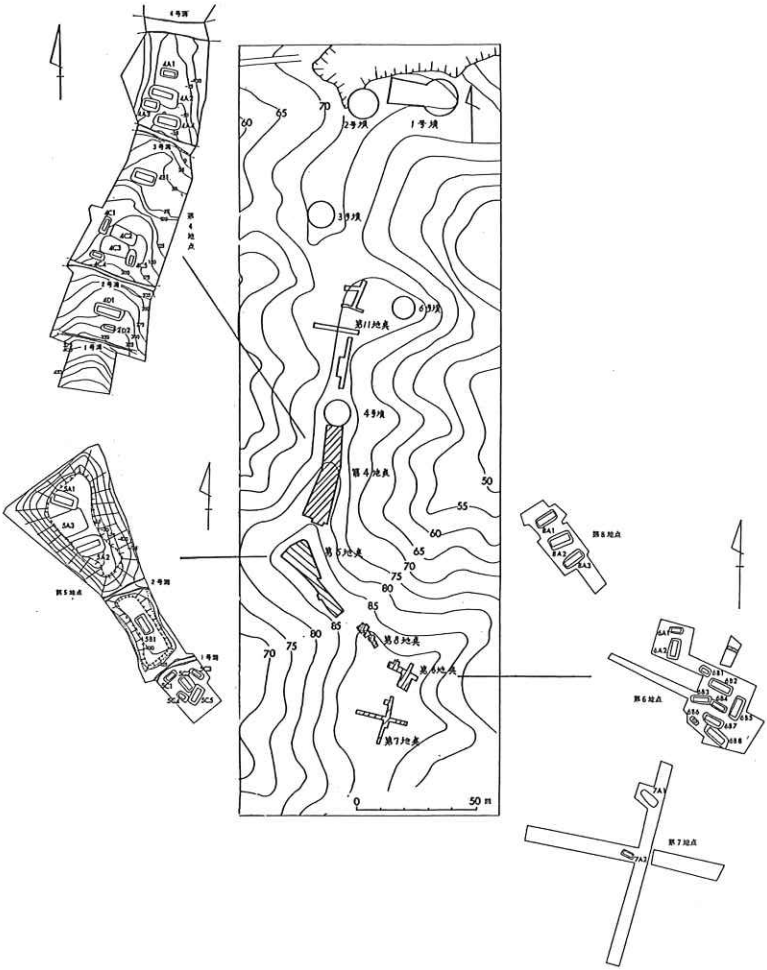


図88　妙楽寺墳墓群各地点の遺構配置

て、小玉などガラス製玉類が皆無であったことも興味深い。

まとめ　土器が示す墳墓群の時期は、隣接する丹後地方の編年観をあてると、おおむね弥生時代後期（畿内第Ⅴ様式後半）から庄内期にかけての時期の墳墓群とみられる。さらに、ごくおおざっぱには標高の高い第６地点が早く造られ、低い第４地点に新しい傾向がうかがえる。

他の同時代の墳墓群と比較すると、円山川左岸の当例と岩井本井墳墓群には玉類がみられないのに比較して、右岸の立石・山崎・半坂・東山例はいずれも碧玉製やガラス製の玉類を有しており、きわだった対照をみせている。

調査件数とも関連するかもしれないが、古墳時代になってもこの状況は基本的に受け継がれていくようで、生産基盤の差があると考えられ興味深い。

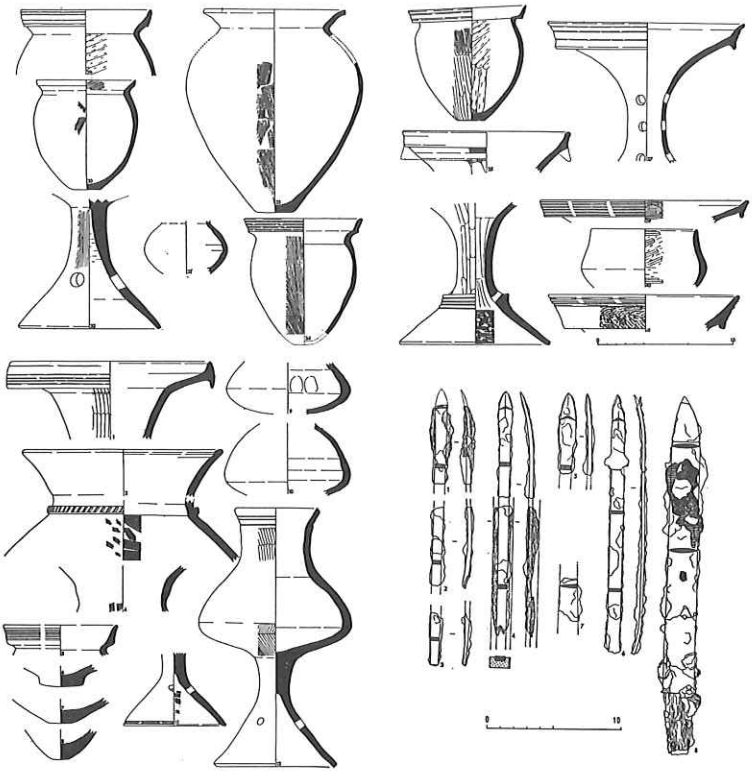


図89　妙楽寺墳墓群遺物実測図

3.19　立石山崎４号墓　立石字北浦ほか

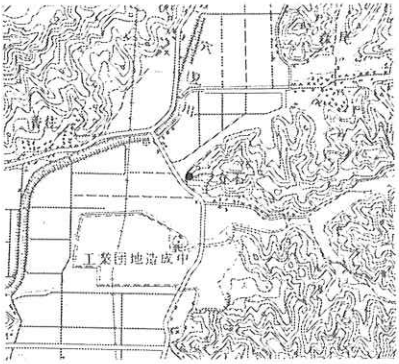


図90　立石山崎４号墓位置図

契機　豊岡市および兵庫県が進めてきた豊岡中核工業団地の造成によって消滅する、主として立石地区内にあった畑地の代替地として山崎古墳群が立地する場所が選定された。

しかしながら当該地には以前から多数の古墳が存在していることが知られており、扱いをめぐって関係者で協議を重ねてきた結果、事前に調査を実施して古墳群の性格などを究明し、取り扱いを協議することとした。調査は、昭和60年４月から９月まで実施した。ここでは、古墳群中で見つかった弥生時代の墓について説明を加える。

立地　山崎古墳群が位置するのは、森尾字北浦付近から徐々に標高を下げながら西に派出してきた尾根稜線が付近で終わりを告げているが、本古墳群は、いわばそうした一連の尾根の最先端に位置していると表現できる。その先端近くから、さらに２本の枝尾根が北に派出している。この小枝脈上の古墳群のうち、西側のものをＡ支群、東側のものをＢ支群とした。

遺構　調査は、２本の枝尾根上に造られた古墳群を対象として実施した。弥生期の墳墓遺構はＡ枝群で検出され、ほかからは見つかっていない。内容は崩壊しているために不明なものの、規模や立地からＡ枝群の中心的位置を占める５号墳の下方に所在する。一見したところ、他の古墳の規模と異なり、墳丘の平坦部分が広く、南北方向で10ｍあまり、東西方向で11ｍ程度の比較的墳丘らしく裾部が円形に回った平坦面が認められた。

まず、墓壙を穿つ場所を確保するために、高い側に尾根方向に直交する溝を造っている。溝は、幅の広い部分で1.3ｍあまり、深さは20 cmあまりと比較的しっかりと掘り込まれている。長さは約９ｍにわたって検出できた。

この溝によって、平坦面を5m×8m程度の広さで確保し、そこに順次3基の埋葬施設が造られている。第1主体は、この平坦面のほぼ中心部に位置し、墓壙の主軸は他と同様に斜面方向に直交している。3基のなかでは最も規模が大きい。

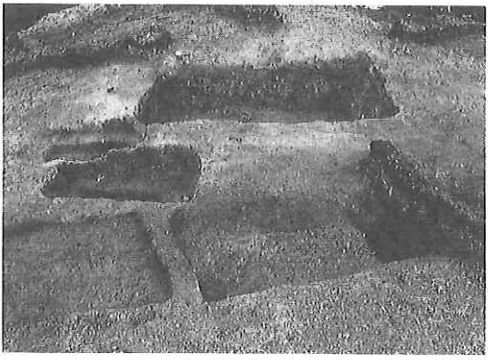
遺物　本墳墓群の遺物は、第1主体と第3主体の木棺と推定される施設の外側、すなわち墓壙内かつ棺外にあたる位置で、故意に破砕されたと理解できる土器が出土している。

第2主体からは、棺内のほぼ中央部から碧玉製玉類が検出された。棺底からわずか1cm程度浮いた状態であり、本来棺底に置かれた遺物とみることができよう。位置から考えると、本遺物は遺体の左手部分にあたり、1個で手玉としていたのであろうか。

まとめ　墳墓群以降の一連の古墳に比較して、やや広い範囲を墓域として確保している。埋葬施設は3基認められ、いずれも木棺を組み合わせた例と推定される。第1主体が他に先行して造られた可能性は高い。

第1、第3主体からは、棺外の埋土部分に故意に破砕したとみられる土器片が置かれていた。

本墳墓がひとつの墳丘として意識されており、古墳が上に重なっていないこと、埋葬施設も重複して造られていないこと、などから古墳群と墳墓群の間に深い関連が想定されやすいが、時期的にはかなりの隔絶があり直接的な関係はうかがいにくい。



写42　立石山崎4号墓全景（左手前は区画溝）と同第2・3主体

3.20　鎌田若宮4号地点　鎌田字若宮

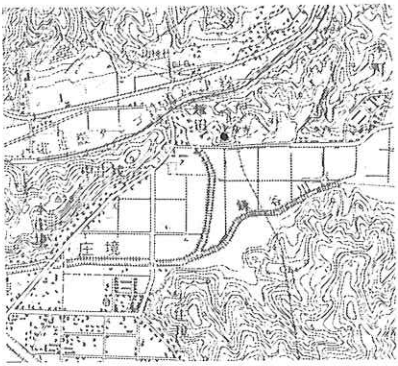


図91　鎌田若宮4号地点位置図

契機　当該地において民間の土取り事業が計画され、昭和60年と63年度に合計10基近くの古墳について緊急調査が実施された。その折に、墳墓群が検出されているので説明を加える。

立地　鎌田地区は、豊岡市円山川の右岸に位置し、豊岡市の市街地から比較的近い位置にあり、国鉄山陰線の豊岡駅から直線距離にして北東へおよそ3.2 kmの所にあたる。主たる丘陵状地形から派出する小尾根のひとつに立地する集団墓で、古墳群の一角に位置している。

墳墓群は、稜線が再びレベルを上げていく直前の位置にあたる部分に造られており、標高は48.90 mを測り、長方形の台状を呈している。

遺構　調査の結果、稜線を削平して8.6 m×5.5 m程度の平坦部を造成し、墓域としていることが明らかになった。低い側は、稜線に直交する細い直線的な溝で区画する。高い側は、緩くL字型にカットしている。高い側でも稜線に直交する細い溝が検出されているが、溝は、稜線の半分までで終わっている。

検出された遺構は、上述の溝状遺構のほかは埋葬施設が多数であった。平坦部中央の第7主体を中心に、それを取り囲むように7.5 m×4.5 mの範囲のなかに10基ないし11基が造られている。ここを調査では4号地点としている。

多数の埋葬施設のうち第7主体はほぼ中央に位置し、稜線に対して直交して造られている。規模は最も大きく、長さ267 cm・幅100 cm・深さ74 cmである。棺は、土色の観察結果から両小口をH型に組む組合（くみあわせ）式木棺と思われる。

遺物　土器類は、表土剝ぎから遺構検出作業にかけて破片ではあるが多数

写43　鎌田若宮４号地点遺構配置

出土した。正確な位置がつかめるものは少なく、第７主体墓壙上を中心に比較的広い範囲で出土した。土器の多くは、原位置を動いているものと思われるが、すくなくとも第７主体で墓上祭祀の土器供献がなされたことは間違いない。

出土遺物は大半が土器であるが、第２・４・７・８・10主体のみが埋葬施設に伴う形で出土している。以下、土器以外の出土状況についてふれておくと、まず、第４主体棺内からは筒状鉄製品２点が棺北東小口から中央寄りで、また玉類は、碧玉製管玉10個が棺北東小口から 20～45 cm の範囲でバラバラの状態で出土した。

第８主体は、棺内から玉類が出土した。やや軟質の碧玉製管玉11点・ガラス製小玉７点で、棺内南東小口から中央寄りでバラバラの状態で出土した。

まとめ　本墳墓群は、第７主体を中心とする10～11基からなる集団墓である。墓域は、稜線を削平し細い溝で区画した小規模な台状を呈している。

副葬品は全体的には少ないが、棺側・棺上に甕を割って置く例、玉類や

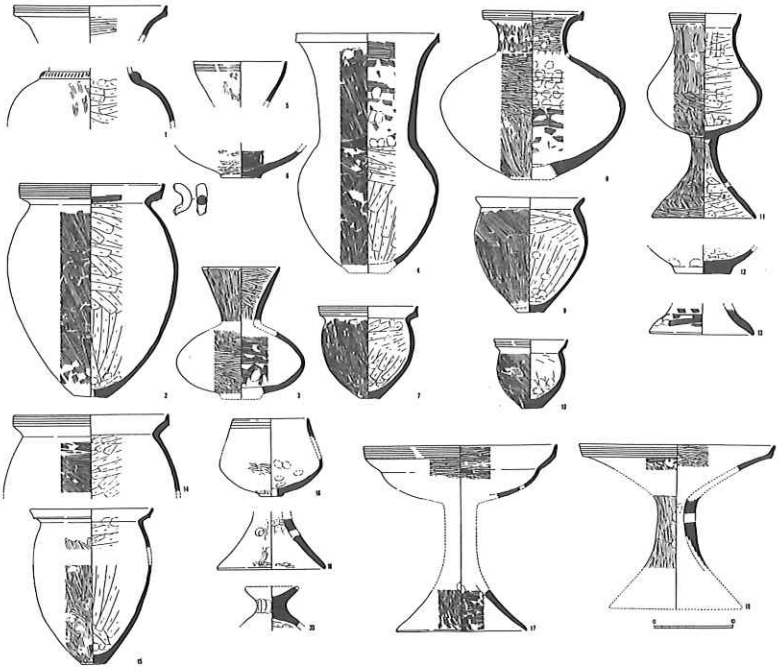


図92　鎌田若宮4号地点出土土器実測図

鉄製品を有する例などがある。

墳墓群の時期は、出土した土器類からみて弥生時代後期後半を主体とするものであることが判明した。ややおくれて庄内期の墓も同一遺跡群内に含んでいるところから、一連の造墓活動をたどる貴重な事例といえよう。

3.21　香住門谷墳墓群　香住字門谷

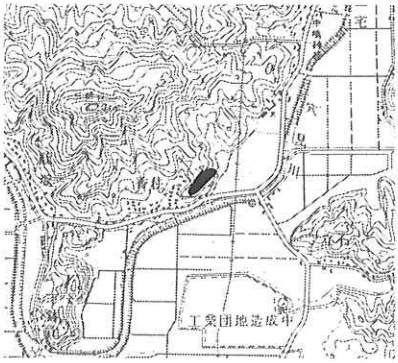


図93　香住門谷墳墓群位置図

契機　調査地の北側一帯が、豊岡市および県住宅供給公社によって住宅団地の開発予定地として策定されて以来、本調査地一帯で民間の土砂採取および後地利用が検討されることとなり、事前に確認調査が実施された。

一連の確認調査は、住宅団地の確認調査と同時に進められ、その結果をみて香住字門谷地区で全面調査がなされることとなった。

立地　遺跡は、香住集落の背後に展開する低丘陵の稜線上に累々と築かれた墳墓群である。尾根頂部はもとより、斜面にかかる部分にも営まれており、この密集した構成は、谷を隔てた北側の丘陵における墳墓の在り方とは大きな相違を見せている。(3.15 香住エノ田墳墓群、参照)

遺構　調査は、平成3年度中に終了する予定で進められているが、ここでは2年度までの概要をまとめておきたい。

9号墓と10号墓について簡単にふれておく。まず9号墓は、現在の水田面からの比高が14mと、今回の調査では最も低い位置に所在する。高い側をカットして半月状のわずかな平坦な地形を造成し、その狭い範囲のなかに8基もの埋葬施設が接するように造られていた。

このうち、第5主体が位置や規模からみて9号墓築造の直接的契機となったものと考えられる。

9号墓は、全体のなかでは副葬品が少ない特徴があり、第2主体で赤色顔料、第3、5、8主体では土器を割って木棺の回りに置く例、第8主体では墓壙上の多数の土器の例など興味深い事例があった。いずれも弥生期の墳墓である。

10号墓は、標高26m付近に造られた4基からなるグループ、11号墓は、

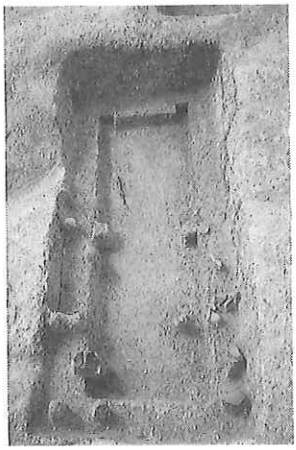
標高30m付近に造られた3基からなるグループである。また12号墓は、標高32m付近に造られており、9・10・11号墓のように、テラスに複数の埋葬施設が造られるのとは異なり、1テラスに1埋葬施設が造られるという状況であった。

遺物　遺物の出土については、全体に墓壙上への土器供献や棺側への土器埋納などが認められ、強烈な墳墓群の個性として指摘できる。また、棺内に鉄製品や玉類を副葬する事例もいくつかで認められ、全般的には裕福な被葬者の集団を想定することができる。

まとめ　すでにみたように、集団墓の在り方にもいく通りかのパターンがあり、かならずしも集団墓として把握しきれないこと、遺物の所有形態をみると規模の大きな墓が豊富な遺物を有するとは断言できないことなどが指摘される。

また、土器を墓上に供献する儀礼、現地で墓壙内に木棺を組み立てた後に、その回りや上に土器を破砕して埋納する事例が多く見つかり、周辺部の同時期の墳墓形態や習俗の異同を考えるうえで貴重な事例が増加した。

写44　香住門谷墳墓群の埋葬施設群在状況



写45　香住門谷墳墓群土器破砕供献の例

3.22　北浦19号墓　森尾字北浦

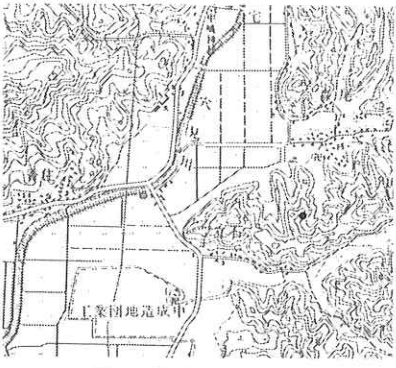


図94　北浦19号墓位置図

契機　豊岡中核工業団地の造成工事に伴って、北浦古墳群の第１次調査が昭和54年に実施された。当時は、当該事業が計画段階のために、とりあえず９号墳から19号地点までが調査の対象となった。

墳丘形態が判然としない、規模の小さな古墳が市域に多数存在することを明らかにした意味では画期的な調査であった。

立地　遺跡は、18号墳を頂点とする付近の地形にあって、そこから主尾根が東北に向って緩やかに下降を開始する地点にある。換言すれば18号墳の墳丘裾に位置している。したがって、北浦古墳群のなかでは高い立地といえる。

遺構　調査は、一連の古墳群の調査の一環として実施したもので、18号墳の墳丘裾を精査していて検出された２基の埋葬施設であった。発見当時、墓壙内に弥生から古墳時代にかかるころの土器片が含まれていたものの、弥生墳墓との認識に至らなかったものである。

検出された遺構は、埋葬施設が２基である。18号墳の墳丘東側裾部で、等高線の乱れが認められたために精査したところ、尾根方向に併列した形で主体部が見つかった。古墳時代の埋葬施設が、ほとんど例外なく尾根方向に直交して営まれているのに対して、好対象をみせている。

墓壙の上方には溝が穿たれており、墓域の一方を示しているのであろう。南の主体部は、壙内に棺の痕跡を見出すことができなかった。しかし、木棺葬の施設の可能性は高い。また北主体部は、長側板方向の墓壙断面が二段に造られており、小口側は素掘りであった。

遺物　遺物は、北主体部墓壙内から出土した２個体分の弥生土器片である。破片で出土しているが、当時の問題意識の低さから適切な取り上げがされ

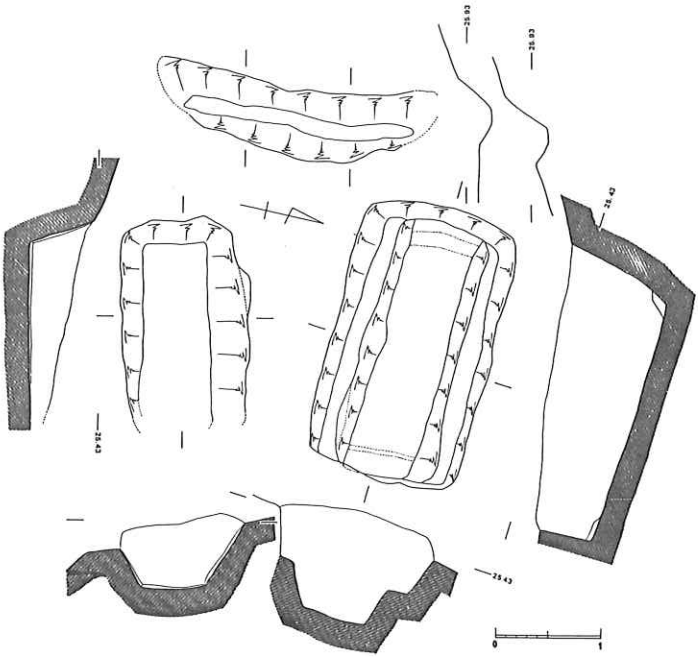


図95　北浦19号墓主体部

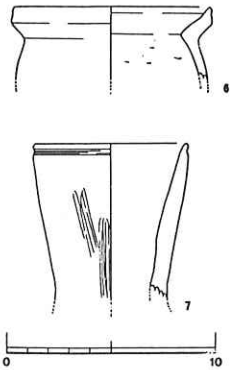


図96　北浦19号墓土器実測図

ていないため、棺を取り巻く破砕土器の例であったか否かは不明である。ここでは、その可能性もあることを指摘しておきたい。

まとめ　報告書刊行後数年を経て、北浦19号地点の埋葬施設が弥生墳墓であることが判然とした。尾根の方向と墓壙を穿つ方向との関係・墓壙の断面形態・出土土器からそのように理解される。

さらに、北浦古墳群で多数の古墳時代の遺構が検出されているにもかかわらず、それに先だつ弥生時代墳墓の実態が十分には把握されていなかったが、19号地点の本事例、また平成２年度の北浦古墳群24号地点付近の調査で、新たに弥生墳墓が数基見つかったことで、時期的な空白がさらに埋まることとなった。

3.23　その他の遺跡

いままで述べてきた遺跡のほかにも、実態は不明ながら注意しておきたい必要のある遺跡を紹介しておく。

まず、港地域では瀬戸字新童住において、磨製石斧が出土している。所属時期は不明であるが、ここでは弥生期のものとしておく。

田鶴野地域では、野上字二位において打製石鏃の出土があった。採集資料であり、詳細は不明である。その後、ほ場整備事業に伴って調査が実施されているが、弥生時代の遺物の出土はなかった。おなじく野上字深田でもほ場整備工事で磨製石器片が採集されている。

五荘地域では、下陰・森津両地区の境界付近で、墓地を造成中に土器の出土があった。頸部から上方を欠いており、また詳細は不明ながら、立地からは墳墓の可能性が高い。宮島地区ではⅤ様式併行の長頸壺が出ているが、遺跡の性格はまったく不明である。奈佐地域では、野垣字岡田においてほ場整備事業に伴って調査が実施されたが、弥生時代後期以降の土器が出土している。宮井遺跡でも後期を主体として、それ以降の遺物が検出されており、既述した宮井神内岩遺跡などとともに後期に爆発的に広がる弥生遺跡のあり方をみせている。

三江地域では、庄境地区で石斧をはじめ中期ころの遺物を出す散布地が知られている。山裾の小さな平坦地などを利用した当該時期の小さなムラがあるのであろう。新田地域では、河谷字前田で蛤刃石斧が採集され、中谷貝塚でも弥生期と想定される磨製石斧が出土している。大篠岡地区の集落内には散布地の大篠岡遺跡があり、完形の蓋形土器などがみつかっている。ほかにも河谷地区では磨製石斧の採集が知られており、縄文期以来の安定した生産基盤の存在が考えられる。

神美地域では、立石山崎古墳群や墳墓（４号墓）付近の調査中に、打製石鏃や磨製石斧の出土があったが、遺跡の性格は不明である。墓に伴う遺物とは考えにくい。上鉢山東山墳墓群の調査中にも、打製石鏃が検出されている。倉見地区では、かなり広範囲にわたる弥生中期（畿内第Ⅳ様式）を主体とする土器を出す遺跡が知られている。